

# 愚者の園—ジェーン・オースティンの世界

藤田清次

## I

現実直視の結果なのか、それとも、読書や思考を重ねた末たどりついた結論なのかは知らないが、我々の多くは、いつしか、私たちの住むこの世界には、善の要素と悪の要素とが同居していて、この両者の相剋葛藤がさまざまな人間模様を描き出すものと決めている。人類の文化史も、この両者のうちの後者、つまり、「悪」の要素の追放の記録であり、私たちの正常な労力の目標も、前者、つまり、「善」の要素の増大を計ることであるとも言える。そしてある意味では、人間の営みの生々しい記録である本格派小説の多くも、善と悪との闘いを描いて来た。そして「小説研究」を自己の本業と見なし、分析と比較と総合のこまかい作業を長年つづけ、力の及ぶ限りは、適切な判断と評価を下すことにつとめて来たつもり筆者も、自己の研究の対象として作品を取り上げる場合、いつしか、そこに「善」と「悪」の葛藤を期待している自分自身に気がつくのである。筆者の場合は、多分、決して少数ではない、過去に扱った文学作品から、ほとんど、自然発生的に体得した知識らしきものがそう思わせるのかも知れない。これは、善人は小説になりにくい、「悪人」の登場を待って初めて活気を呈するという一種の定説めいたものによっても、ある程度、立証されている。ところが、ここ数年来、ジェーン・オースティンの作品を読み、その参考文献を調べて来た筆者が、彼女の嘆かわしい程若過ぎた晩年の作品を数回読みなおして、いよいよ、それらについて解説を試みる段階になって、一つの事実に気づき、はたと当惑に似たものを覚えた。ジェーン・オースティンの『エマ』(1815)にも『説得』(1816)にも「悪役」らしい人物が見当たらないのである。これは筆者にとっては一つの発見であった。

なるほど、ジェーン・オースティンは喜劇作者であり、彼女の作品にはコメディの要素が勝ち過ぎている。そしてコメディは、要するに、善と悪との闘いではなくて、いわば、「賢」と「愚」とのからみ合いを扱ったものである。コメディの作者であるジェーン・オースティンの作品に「悪」の要素が認められないのは、むしろ、当然過ぎる話ではないか、という反論が成り立つとも言える。しかし、考え直してみると、ジェーン・オースティンは喜劇小説の作者である以上に本格派小説の作者である。いつの時代、どこどの国にもよく見かける凡人の愚行や愚言を忠実に描いた喜劇の作者である以上に、18世紀後半から19世紀初葉にかけて、南部イングランドの一地方に在住した中流または中流以上の家庭生活の実相を生き生きと描いた作家としての評価が測り知れないほど高い。彼女は、まことに、「写実の泰斗」なのである。読者の多くは、彼女の小説に、コメディの要素以上に、人間性に関する正確無比な記録を多く見出すのである。

## II

ジェーン・オースティンが最初に世に公表した作品は『良識と感受性 (*Sense and Sensibility*)』(1811)であるが、2年ほど遅れて刊行された『高慢と偏見 (*Pride and Prejudice*)』の方が制作の順序は先である。従って、作者ジェーン・オースティンの精神形成の過程を知るためには、後者、つまり、『高慢と偏見』を先に取り上げるべきであろう。

周知の通り、『高慢と偏見』は『第一印象 (*First Impressions*)』を改作したものである。そして『第一印象』の冗漫だと判断された部分部分を思い切りよく削除圧縮する作業を作者が行ったという事実以外には、その筋の展開、登場人物、作品の構成などに大きな改変を加えたという確証は見当らない。従って、『高慢と偏見』の性格描写と作品構成が、ジェーン・オースティンという作者の精神構造から生まれ出た最初の実質的な産物であると言ってよい。そして彼女が創作意欲に駆られてこの作品の構想を練る際、彼女の脳裏には、確かに、「善玉」と「悪玉」という発想があった。

そして彼女は「悪玉」としてジョージ・ウィカム (George Wickham) を登場させている。しかし、この悪役は押し出しが立派で、好男子で、そして皆に好感を与える男性に描かれている。彼は最初女主人公エリザベス・ベネットに接近し、彼女の方でも彼に心を寄せるが、彼は後にエリザベスの妹リディアを誘惑して駆け落ちをし、男主人公ダーズリーの尽力で、結局リディアと結婚することになる、という程度の悪役である。しかし、このウィカムも、ジェーン・オースティンが描いた、もう一人の悪役らしい悪役と言えるジョン・ウィロビー (John Willoughby) に比べれば、「悪」の度合がかなり濃いと言えそうである。ジェーン・オースティンが彼女の第一作『高慢と偏見』に登場させた悪役ウィカムを、いわば、ある程度トーン・ダウンして描いたのが、彼女の第二作『良識と感受性』の中の唯一の悪玉ジョン・ウィロビーであると言えそうである。彼はこの作品の女主人公姉妹であるエリナーにもメリアンにも、何等実質的な悪行を働くことなしに、作品の本筋から離れて行くことになっている。

『高慢と偏見』のウィカムや『良識と感受性』のウィロビーに比べて、ジェーン・オースティンの第四作『マンズフィールド・パーク (Mansfield Park)』(1814)の中の悪玉らしくない悪玉ヘンリー・クローフォード (Henry Crawford) は、さらにトーン・ダウンして描かれている。彼も、ウィカムやウィロビーと同じく、非常に人当りのよい青年に描かれている。彼は美男子ではないが、愛想がよくてそして弁説さわやかである。そして女性に取り入るのが巧妙である。ただ、彼は登場する主要な女性の三人に恋をし、後に、既に人妻となっているマライアを誘惑して駆け落ちをするほどのどぎつい悪行の持主となっている。しかし、ジェーン・オースティンは、作者自身の言葉を借りれば、「悪や悲惨さを詳しく描く作業は他人の筆に任せたい (Let other pens dwell on guilt and misery)」(III, xviii) 心境の持主であつたらしく、このヘンリーの悪行の詳細な追跡は、意識的に避けている。しかし、ジェーン・オースティンの作品が喜劇であろうとなかろうと、筆者が『マンズフィールド・パーク』の解説を書き終えるまでは、小説は善と悪の葛藤であるということを漠然と信じていたと言ってよい。

ところが、『エマ (*Emma*)』(1815)の解説を作成するつもりで、手許のメモ類をもとにして読後感を整理しているうちに、既に記した通り、筆者は、はたと当惑を覚えたのである。この『エマ』には悪役らしい人物が一人も登場していないのに気づいたからである。もちろん、『エマ』は、ジェーン・オースティンの六篇の長篇のうち、もっとも多くコメディ要素を持つ作品であると見なすことに筆者も異存はない。しかし、この『エマ』がジェーン・オースティンの全作品のうち、もっとも本格的なものであり、洞察 (penetration) と深さを同時に感じさせる作品でもあり、また、女主人公のエマの悔恨の情の描写には、ギリシア悲劇のそれに近いものがあるとも言われている。『エマ』を一篇のコメディとして扱うよりも、イギリス小説の一つの古典として扱う人の方が遙かに多いと言える。ごく素朴な言い方をすれば、「悪玉」を一人も登場させることなく『エマ』を本格派小説の絶品の一つに仕上げたジェーン・オースティンの伎倆を我々は高く評価しなければなるまい。そしてジェーン・オースティンの全作品のうち、登場人物の沈鬱な心象風景の描写がすぐれており、『エマ』にも劣らない洞察と深さが認められる『説得 (*Persuasion*)』(1816)にも、悪役は登場しない。そして、以上の考察からは除外されている『ノーサンガー僧院 (*Northanger Abbey*, 1798, prtcd 1818)]にも、女主人公の相手役であるヘンリー・ティルニーの父親のティルニー将軍が、一時的に「悪役」を演じる以外には、「悪玉」らしい人物は一人も登場していない。

### III

ジェーン・オースティンの作品に、「悪役」を押し退けて登場し、作品の興趣を高めているのは「愚者」であると言えよう。もちろん、「愚者」を主人公に仕立てるような暴挙に類することを作者はしていないが、作者の鋭いアイロニーの光を愚者に当てる時、作者の語り口が生き生きとして来、細部描写にも一種のはずみがつく。

自費出版に近い形で最初に公表された長篇『良識と感受性』の女主人公

の一人であるメアリアンの性格描写の基調は、もちろん、コメディである。彼女の敏感過ぎる時流への反応は、全篇を通じて作者の笑いの標的となっている。しかし、そこに女主人公を遇する創作倫理とも言うべきものが働いているのだろうか、作者は彼女をやさしくたしなめることはあっても、彼女を厳しく非難したり冷笑したりは決してしない。彼女が過度の感受性を発揮して読者の笑いを誘うことはあっても、作者は彼女をむしろいたわり、姉のエリナーを通してやさしくたしなめるにとどめている。『良識と感受性』において、作者のアイロニーの鋭鋒に容赦なくさらされているのは、ジェニングズ夫人その他であろう。お人好しで、ほがらかで、肥満体で、おしゃべり屋で、いつも仕合わせそうな顔をしているこの中年女性は、明らかに、ジェーン・オースティンの世界の住人の一人である。要領を得ない、知性を欠くおしゃべりを嫌う作者のからかいの対象となっているのがこのジェニングズ夫人であり、彼女に対して、作者はあたたかい配慮はあまり示していない。

『高慢と偏見』の中の愚者の筆頭はベネット夫人であろう。開巻早々から巻末にわたるこの長篇の至るところで、彼女はベネット氏の冷やかなアイロニーの対象となっており、彼女の愚かさが受ける最大の罰は、彼女が末女リディアの母親であることであろう。この作品の中の最大の「賢者」である次女エリザベスの未来の夫ダーシー氏の懸命の取り計らいによって、リディアの恥ずべき駆け落ちが、体面を取りつくりつた結婚の形に終わっているが、リディアとウィカムとの駆け落ちの遠因は、愚かな母親のしつきの失敗にある。

作者ジェーン・オースティンが、リディアの駆け落ちは「結婚」という形の善後策を講じてやったのに対し、『マンズフィールド・パーク』のマライアとヘンリー・クロフフォードの駆け落ちは、体面を取りつくりつた範囲を遙かに越えた罪深いものであり、作者の手にあまる事件である。『マンズフィールド・パーク』の主題が「聖職授与」であるためか、この作品にはコメディの要素はあまり見当たらない。トマス・パートラム卿の留守中の素人芝居騒動も全面的にコメディの筆致で描かれてはいないし、喜

劇的人物になりやすいノリス夫人も、冷やかなアイロニカルな視点から眺められているに過ぎない。『マンスフィールド・パーク』第一の喜劇的人物はトム・バートランドの友人であるイエイツ氏であろうか。彼は素人芝居の張本人であるが、ほんの脇役に過ぎないし、流行を追う、金遣いの荒い青年として描かれている。

上に紹介した人物たちとは範疇を全く異し、また、伝統的な喜劇の役柄からはかなり逸脱しているが、作家ジェーン・オースティンのゆたかな才能と鋭い観察力が遺憾なく発揮されている人物創造は『ノーサンガー僧院』のイザベラ・ソープと『説得』のヘンリエッタとルイザのマズグローヴ姉妹であろう。イザベラ・ソープの描写によって、作者は、18世紀後半の南部イングランドの保養地バースに集まる軽佻浮薄な女性像を生き生きと捉えているし、マズグローヴ姉妹の打算と軽薄さを同時に見せてくれる瞬間の描写には、作家ジェーン・オースティンの筆力に、今や、円熟味のほかに厳しさが加わって来たことを示すものがある。『説得』の世界は、作者の若かりし頃の鋭さと軽快さを失っている代償として、今や、人生の冷酷さを直観して得た作者の英知と洞察 (penetration) とがそなわっている。余命いくばくもないことを直覚した天才ジェーン・オースティンの頭脳がその最後の輝きを示しているとも言えようか。

先ず、「言行不一致 (inconsistency)」の標本として描かれた、『ノーサンガー僧院』のイザベラ・ソープのある日の街頭での「しぐさ」と「せりふ」を紹介しよう。

バースで知り合ったイザベラ・ソープとキャサリンが『エドルフォール』論をたたかわせている最中のことである。突然、イザベラがこう言う。「まあ、驚いたわ。部屋のこの隅から速く立ち去りましょう。いやな青年二人がここ一時間ばかり、私を見つめているのよ。私、本当に困っちゃうわ。さあ、あっちへ行って、到着者名簿でも見ましょう。まさか、あそこまではついて来ないでしょう」やがて、イザベラは、見張り役を引き受けているキャサリンから、その二人が立ち去ったから安心しなさい、と言われる。それから先の描写を引用しよう。

「それで、どちらへ行ってしまったの？」イザベラが急いで振り向きながら言った。「一人はとても男前の青年だったのよ」

「二人は墓地の方へ行ったわ」

「あの二人から逃れられて、私、本当に嬉しいわ。それじゃ、エドガーズ・ビルディングへ参って、私の新調の帽子を見てみたいんだけど、あなた、どうなさる？ あなたも私の帽子を見たいとおっしゃったわね」

キャサリンも即座に賛成した。「ただね」彼女はこうつけ足した。「私たち、あの二人に追いつくことになるかも知れなくてよ」

「ああ、そんなこと、一向に気にならないわ。私たち、足ばやに歩けば、あの人たちを、じきに、追いこすことになるわ。それに、あなたに、私の帽子をお見せしたくてたまらないんだもの」

「でも、ほんの二、三分間だけ待てば、あの二人に会う心配は全くなくなりますよ」

「あの人たちに、私、そんなお世辞など払いたくないわ。私、それほどの敬意を払って男性を扱う気持は少しもないのよ。そんなことをすると、男性を甘やかすことになるもの」

そのような理路整然たる言葉に反対することなど、キャサリンには、とてもできないことであった。それで、ソープ嬢の独立心と男性一般を見くだしたい決意とを示すために、二人は、この二人組の男性を追いかけて、できるだけ速い歩調で歩き出した。

今日の保養地にもよく見かけそうな、軽薄で無定見な女性以上に「言行不一致で (inconsistent)」,そしてコケティッシュな娘の姿を生き生きと捉えた一場面であると言える。しかし、このようなイザベラ・ソープの描写には、若い浮気娘をからかう作者の筆に、ゆとりと遊びとが感じられ、読者の方でも、それから一種のさわやかな印象を受けることになるとも言えそうである。ところが、『説得 (*Persuasion*)』(1816)に登場するマズグロウ姉妹の描写には、執筆当時の作者の沈痛な心境を反映しているためだ

ろうか、ゆとりも遊びも感じられないし、言いようのない凄味が現われてるものようだ。

20歳と19歳になったばかりのヘンリエッタとルイザはエクセターの学校で、世間並の教養をしこまれてわが家に帰り、お上品で、仕合わせで、陽気な暮しを楽しみ、姉のヘンリエッタと牧師補チャールズ・ヘイターとは恋愛関係にある。ところが、女主人公アン・エリオットの昔の恋人で、一度は婚約までしたのに、信頼しきっているラッセル夫人の忠告に従って、婚約を解消したことのあるウェントワース海軍大佐が出現すると、ヘンリエッタの心が、たちまち、このウェントワースの方に傾いてしまう。そしてヘンリエッタの妹ルイザもこのウェントワースが好きになり、マズグローヴ姉妹の兄チャールズは、ヘンリエッタとヘイター、ルイザとウェントワース、の二組の結婚を期待しているというシチュエーションが設定される。そしてこのヘイターに結婚適格性を与えることになる、好都合な牧師補の口が見つかりそうだという彼の言葉を、ヘンリエッタがうわの空で聞いている場面の描写は、まことに、絶妙である。(I, ix)

「まあ、私、とても嬉しいわ。でも、私、あなたがきっとそうなるだろうと、いつも思っていたのよ。あなたがきっとそうなるだろうと思ってたわ。私には、そうでないようには思えなかったもの——つまり、ねえ、シャーリー博士が、きっと、あなたに牧師補として来てもらうに決ってますもの。あなたは博士の確約を得てらっしゃるわね。ルイザ、あの方お見えになって？」

マズグローヴ姉妹はウェントワースの来るのを今か今かと待ちわびており、ルイザは窓際に立って外を眺めていたのである。ヘンリエッタは、いい加減にヘイターのお相手はしているが、心は、ルイザに劣らず、まだ姿を見せないウェントワースの方へ行ってしまっている。「ルイザ、あの方お見えになって？」という短いせりふには、作者ジェーン・オースティンの女性観察の集積とも言えるアイロニーがこめられていると言えよう。

『説得』はジェーン・オースティンの六篇の長篇のうち、もっとも喜劇

的でない作品である。全篇にわたって、一種の重々しい気分がみなぎっており、作者の持味であるコメディの調子にもどるのは、作品のごく僅かの部分部分においてである。『説得』においては、コメディは、いわば、間奏曲のステータスしか与えられていない。しかし、既に紹介済みのマズグローヴ姉妹のほかにも、いつまでも自分の容貌と身分に過度の自信を持ち、虚栄心のとりこになっているウォルター・エリオット卿、このエリオット卿のそばにまつわりつくクレイ夫人（彼女は後に、これまた、この作品の主要な愚者の一人であるウィリアム・ウォルター・エリオット氏の情婦になる）、それにマズグローヴ家に嫁したメアリー・エリオットなどの愚者群像がこの作品の興味を盛り上げているが、ジェーン・オースティンが創造した愚者の最たるものは『エマ』に登場するベイツ嬢であろう。そしてこのベイツ嬢の描写は、ジェーン・オースティンの作品に新しい意味を与えることになる。

#### IV

ジェーン・オースティンの性格描写は、主として、「仕草」と「せりふ」とでなされる。そして彼女が作家としての円熟味を増して行くに従って、さまざまな文体上の試みが、彼女の性格描写の道具立ての一つに数えられるようになる。そしてジェーン・オースティンほど、「せりふ」の喜劇的効果をたくみに活用している作家も少ないのではあるまいか。『良識と感受性』の中のジェニングズ夫人のせりふ、『高慢と偏見』の中のベネット夫人やエルトン夫人などのせりふ、『マンスフィールド・パーク』の中のノリス夫人のせりふなどが先ず念頭に浮かんで来るが、『エマ』の中のベイツ嬢のせりふは、量的には、他の喜劇的人物のそれを遙かに凌駕しており、彼女の非知性的な性格をリアルに表わしている。作者ジェーン・オースティンは、彼女の愚かな、長ったらしいせりふを、ふんだんに記録して、読者と一緒になって笑って見せる。そして『エマ』の女主人公エマ・ウッドハウス嬢も、明らかに、ベイツ嬢を嘲笑し、且つ、小馬鹿にしている。

このベイツ嬢に対するエマ・ウッドハウス嬢の嘲笑が頂点に達する場面は、ことのほか有名であるが、ここでも、その場面を促えて、少し詳しく論じてみたい。

ジェーン・フェアファックス嬢と秘密に婚約しているフランク・チャーチル青年は、ジェーンとの間柄をカモフラージュするつもりなのか、この物語の女主人公エマ・ウッドハウスに接近するそぶりを見せる。そして長篇『エマ』の全篇を通じて、フランクとエマとの間でなされる対話は、しばしば、高度に知的な掛け合い漫才のような効果をあげており、この長篇の一つの見せ場をつくっているが、第43章の中程では、ベイツ嬢も同席しているところで、次のような応酬がなされる。そのさわりの部分を紹介しよう。

「ウッドハウスさんのご命令によって申し上げますが、皆さまが考えておられることをはっきり知る権利をあの方は放棄なされて、ただ、皆さまの銘々が何か、一般的な意味で面白いことをおっしゃってほしいとウッドハウスさんが申しております。ここには、私のほかに七人の方がおられます（ウッドハウスさんのおっしゃるには、私はとても面白いことを既に申し上げたそうです）。それで、あの方は、皆さまの銘々が、それぞれ、散文でも韻文でもよろしいし、創作でもむしかえしでもよろしいから、何か非常に気の利いたことなら一つ、程よく気の利いたことなら二つ、非常に退屈なことなら三つほど、おっしゃっていただきたいと申されますが、あの方は、それらをお聞きになって大笑いなざることを保証しておられます」

「まあ、大変結構ですわ」とベイツ嬢が大声で言った。「それじゃ、私、何も心配するには及びませんわ。『非常に退屈なことなら三つほど』ですね。それなら、私にはお誂え向きですわ。私が口を開けば、非常に退屈なことを三つは言うに決まっていますもの。——（皆の同意をすっかり当てにして、いとも愛想よく、あたりを見まわしながら言った）——皆さまはそう思っただけでございませう？」

エマは、つい、言わずにはいられなかった。

「あら、ベイツさん、それは難しいかも知れませんわ。ご免なさい——でも、数を制限して下さいね——一度に三つだけですのよ」

日頃、ベイツ嬢ののべつ幕なしのおしゃべりの被害を蒙っているエマ嬢が、彼女の長いおしゃべりを封じる意図から、失礼千万にも、つい、こう言ってしまったのである。ところが、頭の回転が速くないベイツ嬢は、エマの真意がすぐには判らなかつたらしく、恐らく、ぎょんとした顔をしていたらしいが、数刻経って、はっと気がついた時にも、彼女は腹を立てようとはせず、ただ、顔を少し赤らめて、彼女が心を傷つけられたことを示したに過ぎなかった。

エマとベイツ嬢との間の、以上のようなやりとりの一部始終を目撃したナイトリー氏が、あとでエマと二人きりになった時、彼女を厳しくたしなめる。

「エマ、これまでもよく話したことだが、もう一度言わせてもらいますよ。これは許してもらおうというよりは我慢してもらわねばならない特権だと思うが、私は、やはり、その特権を行使しなくてはならないのですよ。あなたの間違った行いを見ると、私はそれをたしなめずにはいられないのです。どうしてあなたはベイツさんにあんなに思いやりがないのですか。彼女のような性格、年齢、境遇の女性に対して、どうしてあんな傲慢不遜な機知をふるうのですか——エマ、あなたにそんなことができるとは思わなかったよ」

ナイトリー氏の直言を無にするほどの無神経さをエマは、もちろん、持ち合わせてはいない。エマは雷にでも打たれたような衝撃を受けたに違いない。彼女ははっとなり、顔を赤らめ、済まないと思った。しかし、勝ち気なエマは、それでも、笑いとぼそうとして、「あんないい人はどこにもいないことは分っていますわ。でも、あなたも、きっと、認めておられる

ことでしょうが、あの人の中には、善良なものと滑稽なものとは、じつに不幸にも、入り混っていますのよ (what is good and what is ridiculous are most unfortunately blended in her)」と答えたりするが、「貧しい人」を馬鹿にするものじゃないよ、とこんこんと説きさすとナイトリー氏の言葉がエマの肺腑までしみとおる。その証拠に、ナイトリー氏にそうたしなめられたエマは、ろくに挨拶もせずに車上の人となったけれども、彼女は打ちのめされ、涙がとめどもなく流れ落ちた。ジェーン・オースティンの適確簡潔な表現を引用しよう。賢者を自任して来たエマが大変な愚行を犯した直後の心理状態を作者は見事に描ききっている。

彼は既にきびすをかえしたあとで、馬車も動き出していた。彼女は振りかえってうしろを見つけたが、無駄だった。やがて、馬車は異常とも思える速さで丘を半ばほどくんだり、すべてをうしろ遠くへ残して行った。彼女の心は言い表わし得ないほどにかき乱れていた——それはほとんど彼女が隠しおおし得ないほどであった。彼女は、どんな場合にも、これほど動揺し、口惜しいと思い、悲しみを味ったことは一度もなかった。彼女はこの上もなくひどく打ちのめされた。彼の言葉の正しさは否定しようもなかった。彼女は心の底からそう感じていた。ベイツさんに対して、どうしてあれほど非人情で冷酷な仕打ちができたのだろう！——自分が大切にしている人に、あんなに酷評されるようなまねを、どうしてしたのだろう！そして感謝、同意、共感をこめて親愛の言葉を一つも言わずに、どうして、あの方が去って行くにませたのだろう！

時間が経っても彼女の平静心はもどってはいけなかった。反省すればするほど、ますます心が痛むのであった。こんなにも悲しい思いをしたことはなかった。口を利く必要がなかったのがせめてもの仕合わせであった。そばにはハリエットがいるだけで、彼女も元気がなく、疲れはてて、黙っていたいらしかった。エマは家にたどりつくまで、涙が頬を流れ落ちるのにまかせ、涙が異常なまでにあふれ出ても、それを止める努力すら払わなかった。

## V

活発で愛想がよくて、お話し上手で、ダンスが大好きで、そして甚だ口が悪かったらしいジェーン・オースティンの少女時代の書きものは、すべて断片的で、コミックな調子のもものばかりである。そして成人してから書き上げ、一旦、篋底に仕舞いこんでから、10年以上後に推敲の上公表した長篇小説の基調も喜劇的である。「白状しますけど、私は愚行や馬鹿馬鹿しさ、気紛れや無定見に接すると、たまらなく面白いのですよ。それらを見ると、私は笑ってよい時には、いつも笑うことにしています (Follies and nonsense, whims and inconsistencies, do divert me, I own, and I laugh at them whenever I can)」と『高慢と偏見』の女主人公エリザベス・ベネットに言わせた「せりふ」(xi)が、多分、作者自身の本音であったと思われるほど、彼女の作品には愚者の愚言や愚行をリアスティックに記録した個所が多い。しかし、ジェーン・オースティンの作品には、それを無条件で喜劇の部類に入れてしまうことを拒否する他の要素が多分にある。ジェーン・オースティンの作品は、「写実の泰斗である」と言われるほど、18世紀末のイングランドの地方在住の有閑階級的生活様式を生き生きと描ききっている。そして彼女の作品には、作者が円熟の境地に近づくに従って、ますます、深さと洞察が加わって行っている。若かりし頃は愚者の愚行や愚言を、興味本位で楽しんだらしいジェーン・オースティンの視点にも、人生体験を重ねるにつれて、やがて、「理解」と「共感」がそなわるようになって行く。彼女の晩年の作品には、さらに、悲しい過去への回顧に伴う悔恨の情の表現が増して行き、ある意味では、悲劇的要素とも思えるものが見出される。彼女が熟知していた南部イングランドの地方共同体にも、愚者の愚言や愚行が満ちあふれ、それらを忠実に描きつづけたジェーン・オースティンが、いつしか、愚者たちを暖く見守る英知とやさしさを身につけるに至ったのであろうか。喜劇作家として出発したジェーン・オースティンという女性作家も、狭い社会においてではあったが、人生体験を積

み、創作の筆を進めて行くにつれて、一步一步、大作家への道をたどりつつある途中で、不本意千万にも、病魔に襲われ、45歳という若さでこの世を去らねばならなかったのは、まことに、嘆かわしい限りである。

(9月30日, 1979)